

---

# ホーンデットザレスト

桜田祐二

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ホーンデットザレスト

### 【Nコード】

N0515A

### 【作者名】

桜田祐二

### 【あらすじ】

悪魔の勢力が突然、世界の地上支配を開始し、人間達は世界を守るために戦争を起こすが、戦争に敗北してしまう…。人間達と悪魔の戦いを描く長編ファンタジー。

## 「プロローグ」

「ホーンデット」

それは地獄の悪魔達が地上を支配するために作った悪の寶石。

この世界では、戦争もなく皆、平和に暮らしていたがユーズ民主国領地の山岳地帯で突如、空に炎が巻き上がり、ついに悪魔すなわちホーンデット軍が地上を支配するためにとてつもない数の軍隊を派兵してきた。

ホーンデット軍は、そのままユーズ民主国を攻め滅ぼし新しく

「ゲート侵略国」

という国を建国した。

この事態に動揺を隠しきれない人間達は、ようやくホーンデット軍との戦争を決意。

四カ国からなる連合軍を結成し、ホーンデット軍と、この世界を巡る大戦争を始めた。

だが、所詮は人間と悪魔。

連合軍の大敗となり、わずかに生き残った人々は、至る所の地下でひっそり暮らして、ホーンデット軍の攻撃を逃れていた。

## 第二章 犠牲

敗戦から一年が経過した。

この日、レオンは地下街でホーント軍に対抗するために武器の制作をしていた。

「あともう少し……よし出来たぞお名付けて、ザードブレード。」

レオンはこれを含めて、五つ目になる武器を開発した。

だがレオンが作った武器はどれも普通の剣で、得に

「ホーント軍に対抗できる」

って訳でもない。その時、後ろのドアの所で笑い声が聞こえた。

「またしようもないやつ作りやがって。」

レオンの友達、ランセンが言った。

「何がしようもないだ！この剣は凄いいんだぞ」

怒鳴り気味でレオンは言った。

「凄いや？魔法でも使えるのかい？」

この一言でレオンは黙り込んでしまった。

沈黙が流れる……。だがすぐに沈黙は破られる。コンコン。

「中に入るぞ」

ドアが開いた。レオンの親友、ディニーだ。

「地下連合本部に続く穴が完成したぞ」

ディニーが言った。その時にランセンは、部屋から何も言わず出て行ってしまった。

「チツ何だよ」

ディニーは言った。ディニーはレオンの顔を見て、どんな状況だったかすぐに理解した。

「ランセンとケンカしたんだな？どうして？」

「べつ別にたいしたことないよ！それと、もう俺…武器を開発するの辞めるよ……」

レオンが言った。

「何で？続けるよ！」

デイニーは強く言った。返事はなく、レオンは再び、黙り込んでしまった。

「なあ！レオ……」

「一人にしてくれないか？ゴメン」

割り込むようにレオンは、言った。

「分かったよ。でも開発やめんなよ。」

デイニーが言った。

しかしレオンの返事は無かった。

デイニーが部屋から出て行くと、そのままベットに飛び込んで寝てしまった……。

その頃、ランセンは地下街の中央ホールの休憩所の椅子にもたれ掛かって、考え込んでいた。

「あんなガラクタでホーンデットの野郎に勝てる訳ねえだろ。何考えてるんだアイツ」

独り言をつぶやいていた。その時、

「ここに居たのか、ランセン！探したんだぞ。」

デイニーが随分探したような顔をした。

そのままランセンの隣に座って、バーのマスターにワインを注文した。

「何の用だ？さっきのことか？」

ランセンがデイニーに聞いた。

「そうだ、どうしてケンカをした？」

するとランセンが

「レオンは、ホーンデットの奴らを舐めてる。あんなガラクタ同然の物で勝とう、何て思ったなら必ず命を落とす、俺の親父みたいにな！」

「親父？どういうことだ？」

デイニーが言った。

「俺の親父は一年前の戦争の時に、第一騎士団の隊長をやっていたんだ、戦争に行く前は、悪魔なんて弱いもんだとか抜かしていたが、いざ戦争になると苦戦をしいられ、あげくの果てには敗戦。結局、親父は二度と帰っては来なかった。俺は悪魔達を舐めてたから負けたんだと思っっている。だからレオンにはそうなってほしくなかったんだ。」

ランセンは真剣に言った。

「俺は、レオンが悪魔達を舐めてはいないと俺は思うがな。アイツはアイツなりに頑張ってるし」

ディニーが言った。

「どういうことだ？」

ランセンが聞いた。するとディニーが席を立ち

「もうそろそろ部屋に戻るわ！あと、レオンのことは自分で考えるんだな。」

そう言い残し、休憩所を後にした。

ランセンは再び、深く考えこんでしまった…。

そして、しばらくするとランセンは席を立ち自分の部屋に戻って行った。

その頃、レオンは眠りから覚め、自分の開発した五つの武器を眺めていた。

「しょうもないかあ…俺の武器…」

レオンはため息をついた。そして、何かを思いついた顔をして

「よし！全部、土に埋めることにしよう。そうすれば、全部忘れることができるし」

レオンはベットから跳び起き、五つの武器が入る所を探していた。

「ここでもいいかな。」

部屋のタンスをどかし、スコップで穴を掘り始めた。とつその時、

「ガッン！」

と鈍い音が鳴った。

「んっ？なんかあるのかな？」

レオンはスコップで掘るのを止めて、音が鳴ったと思われる所を手で掘り始めた。

しばらく掘り続けていると箱らしきものの角が見えてきて、箱だと確認した。

「何だ、ただの箱か…」

レオンは言った。

その箱は土がこびりついていて、レオンはその土を取るのにとめてこずった。

だが数分が経つと、ようやく土が取れ、箱が開けるようになった。

「ふう〜。やっと開いたか、早速開けるぞ。うん？もしかしたらお宝かも」

呑気なことを言いながら、箱を開けた。すると中から一冊の本が出てきた。

「なーんだお宝じゃねえし。」

悲しそうな顔をして、箱から本をとり出し、手に持った。

その本は赤く、表紙に十字架が描かれていた。

「これ聖書かな？」

レオンは思った。そのままページをめくっていくと気になるページを見つけた。

「これって…悪魔に、似てるかも…」

レオンはそのページをさらに声に出して詳しく読み始めた。

「この世が再び闇にそまる時……人間達は、

「クロスレンズを開発し悪を封じ込め、この本を開けし者が世界を救う…。救う？開けし者…それってまさか…俺のこと？うそだろ？」

レオンの手は汗でにじんでいた。

「そ…そうだ、ランセンとディーニを呼んでこようっ」

レオンは聖書をベットの枕の下に隠し、走って部屋を出た。

最初に向かったのは、ランセンの部屋だった。

中央ホールを抜けて訓練所を右に曲がるとランセンの部屋が見えてくる。レオンはノックをせずにドアを開けた。

「ランセン！ 凄いの見つけたんだ、ついて来てくれ！」

ランセンはビックリしたのか、ビクッとドアを見た。

「ちゃんとノックしろよ！ ビックリするじゃねーか。」

ランセンは怒鳴りながら言った。

「ゴメン、でも本当に凄いからお願い！」

「ったく、どんなものか知らねえーけど分かったよ。」

「本当に？ ありがと！」

レオンは言った。

ランセンとレオンは次にデイニーの部屋に向かった。

部屋には着いたが、デイニーは居なかった。

しかたなく二人でレオンの部屋に行くことにした。

「デイニーどこにいったんだろ？ ん？ 俺の部屋に誰か居るぞ？」

レオンは言った。部屋の中に居たのは、デイニーだった。

「ようレオン、部屋の前で呼んでも居なかったんで勝手に入ったよ。」

「

別にいいよ。それより凄いの見つけたんだ！」

「さっきからこればかり言ってるんだ。」

ランセンが言った。レオンは枕の下に隠していた聖書を皆に見せた。

「クロスレンズ？ 何だそれ？」

ランセンが言った。

「悪に対抗出来るか？ 本当にかな？」

デイニーは言った。さらに、

「世界を救う」

と書いてあるページを見せた。

「ふん、ばかばかしい。お前が世界を救うなど、有り得る訳がない。」

「

ランセンは微笑をしながら言った。

「そうだよレオン。あまり気にすんな」

デイニーはレオンの肩を叩きながら言った。

「そうだよね。だだの迷信に過ぎないよね」

レオンは安心したのか、ため息を吐いた。

「用件はそれだけか？ ないなら部屋に戻る」  
ランセンが言った。

「俺も帰るわ、それじゃまた今度来るわ」

皆が部屋から出ようとしたその時、ドーン。ものすごい大きな音が地下街に鳴り響いた。

「何だ今の音は？」

ランセンは部屋の外を見てみた。

すると、地下街の上部にぽっかりと大きな穴が開いていた。

「どうして穴が？」

地下街の住民は皆揃えて上を見上げている。

その時だった。

穴から、黒い何かが大量に落ちてきた。皆が恐れていたことがついに起こった。

「ホ、ホーンデット軍だ！」

ランセンは以上な反応を示した。

「マジかよ……」

ランセンはドアを閉め、タンスや椅子などをドアの前に置いた。

「何ぼーとしてんだよ！ お前らも手伝えよ！」

レオン達はあまりの恐怖に足を動かすことが出来なかった。

「おい！」

この一言で、ようやく声に気付き、レオン達はベットなどをドアの前に運びだした。

「レオン！ お前が作った剣を貸せ！」

ランセンは言った。

「わ、分かった、デイナーお前も俺の剣を持つんだ！」

レオンは捨てようとしていた剣を取り、一人ずつ渡した。

「よし、もう一つのドアから、本部に繋がっているトンネルに向かうんだ！ 俺が援護する。それとレオン、聖書も一緒に持ってゆけ！」  
レオン達はドアの前に立った。

「合図をだしたら、ダッシュで走るんだぞ！分かったな？行くぞ！  
1、2、3今だ！」

ドアを突き破り、トンネルに向かってダッシュに走り始めた。  
後ろからついてくる、悪魔を一人、二人とランセンは切って行き、  
レオン達を援護した。

「よし、もうすぐトンネルだ！頑張れディニー」  
レオンは言った。

第二ホールを左に曲がり、トンネルが見えてきた。

トンネルの入口では、地下街守備隊が必死にホーンデット軍の侵入  
を阻止していた。

レオン達の存在に気付いたのか、守備隊がレオン達をトンネルに入  
れるため、道を作り始めた。

「君たち！今がチャンスだ！早く中に入れ！」

レオン達は守備兵が作ってくれた道を通り、何とかトンネルにたど  
り着いた。

「駄目だ！これ以上耐え切れん！本部へ続くトンネルの門を閉める  
！」

守備隊長が言った。

「待ってください！まだ…ランセンが残っています！もう少し待っ  
て下さい！」

レオンは言った。

「スマンがそれは出来ない…本当にスマン…許してくれ…門を閉め  
る！」

その時だった。第二ホールの横で立っているランセンが見えた。レ  
オンは必死に叫んだ。

「ランセン！何立ってんだ！早く走って来いよ！ラン……」

レオンは声が枯れていた。その時ランセンの声が聞こえた。

「ゴメン、レオン…俺はここでやらなきゃいけないことがある。だ  
からそこには行けない……。あと、お前が作った剣なかなか良いじ

やねえか。それじゃ……バイバイ……」

ランセンは泣きながら言った。除々に門が閉じるなか、

「ランセン待つてくれ！お願いだから……」

レオンの目には大量の涙が溢れていた。

「そして門が閉まる瞬間、微かに、

「ありがとう……」

と言う声がした。

今の言葉を聞いて、レオンは泣きながらしゃがみ込んでしまった。そして完全に門は締まってしまった……。

次の瞬間、ランセンが地下街を崩し本部への道を完全に閉ざした……。トンネル内は涙で溢れ帰っていた。そしてレオン達は本部へと歩き出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0515a/>

---

ホーンデットザレスト

2010年10月11日01時17分発行